意味とアスペクト
—— ウィトゲンシュタイン「哲学探究」第Ⅱ部解釈

上田　徹

Wittgenstein は「哲学探究」第Ⅱ部において、いわゆるアスペクト知覚の問題について取り上げている。「哲学探究」のなかでそれまで彼自身のおこなっている意味の理解や規則に従うことといった問題と一見異質に見えるかもしれないこのアスペクト知覚の問題について、かれの立場は揺らいでいるようにも見受けられ、議論の帰趨は必ずしも明瞭なものではない。それには十分な理由があると思われる。なぜかれはアスペクト知覚を問題にせざるを得なかったのか、また彼自身の立場からこの問題への応答はどのようなものであるべきかという点について明らかにしてみたい。

Ⅰ　「見る」と「として見る」—— その類似性と差異

Wittgenstein はまずつぎのようにアスペクトの認知について提示している。

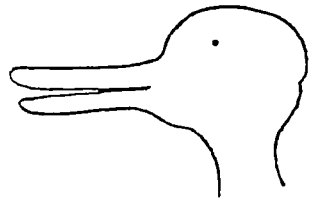
> 「わたくしは一つの顔を熟視し、突然ほかの顔との類似に気づく。わたくしは、その顔が変化しなかったことを見ている。にもかかわらず、それを別様に見ている。この経験をわたくしは「あるアスペクトの認知」と呼ぶ。」(PI, p.193)

さらに、かれはそのアスペクトの認知によってとらえられた視覚印象は、一方において「解釈された」ものであるという点で「間接的な記述」であるが、他方では、わたしはその視覚印象を現実に「見ている」という点では、色の感覚印象について述べる場合のように、直接に知っていなければならないともいう。

このような Wittgenstein の問題提示のなかに、すでに、かれがアスペクト知覚において感じていた問題点がはっきりと語られていると思われる。それはどのような問題点なのであろうか。アスペクト知覚には、二つの画像の間の類似性に気づく場合のように、はじめにその画像を眺めていた段階からそのアスペクトに気づく段階への変化がある。この段階においてもわれわれはその画像を見ているのであるが、ある類似性の相において「として見ている」ことを同時に知っているのである。つまり、このような「として見る」ことを含んだアスペクト知覚と、端的な「見る」ことの両者に関して、概念的な境界設定を設けることを Wittgenstein はアスペクト知覚を考察するなかでおこなおうとしているのである。

しかしながら、この場合問題となるのは、「見る」と「として見る」がどのような差異をもっているのかということである。まず、「見る」ことについて考えてみたい。なにか、例えば、目の前にある手を見る場合、われわれはそれを見ていることを端的に知っているのであり、その実在について疑いをはさまない。つまり、その手を見ていることを「解釈する」あるいは「推測する」という可能性はわれわれから排除されている。同様にして、われわれは赤の感覚印象について「赤」という言葉の習得とともに表出することができる。そのために、心的過程において心の中にある赤の表象像を指示するという迂回路を経る必要はない。ここでの Wittgenstein の「見ること」についての考察が、ここまで「哲学探究」のなかで彼のおこなってきた「意味

の理解」についての考察をベースにしているものであることに注意しなければならない。すなわち、「意味する」ことは、体験ではなく、心的過程ではなく、精神のメカニズムが対応するものでもないと Wittgenstein は主張している。かれが「意味する」ことについてこのような分析をおこなった理由は、そのような「意味の理解」について、誤解を生じさせる映像が、言語的に、あるいはそのほかの他者が観察しうる仕方で表出されたものと「意味する」ことがもっている内的な関係を断ちきる可能性を与えるためであった。ここから、「見ること」と「見られたもの」の関係も、同様の理由から、それが直接的に知られたものである限りで、それ以上の「解釈」の余地がないものであるとかれは考えているのである。



だが「として見る」場合は事情は異なる。例えばウサギ－アヒルの頭を見て、はじめそれをウサギとしてしか見ない場合、わたしはその知覚について端的に叙述し、報告する。それは色の感覚印象を報告する場合と同じであろう。しかし、それはその同じ画像対象がウサギにもみえ、アヒルにも見えるということを心得ている他人からは、「かれはその画像をウサギとして見ている」と語ることを妨げない。なぜなら、その場合は、わたしが視覚像に対してある解釈をおこなっていると語ることが有意味だからである。「見る」ことが、アスペクトの転換が可能な画像においては「として見る」ことであり「解釈する」ことになる。もしも、自分自身が意識的に特定のアスペクトにおいて見ることを意図しているなら、その「見る」こととの差異はいっそう顕著となるであろう。

しかし、このことはさきにみた「見る」ということをそれ以上の「解釈」の排除としてとらえようとする Wittgenstein の考えと相容れない。そのような意味における「見る」ことを優先させてアスペクト知覚を説明しようとするなら、われわれはアスペクトの転換のさいにはそれぞれ異なった対象を見ていると考えるのが自然である。Wittgenstein は「論考」のなかで、アスペクト知覚について、われわれが異なる二つのアスペクトにおいて立方体を見る場合、われわれは二つの異なる事実を見ているといっている（Tractatus, 5.5423）。「哲学探究」での Wittgenstein もまた、ウサギ－アヒルの頭について「このように見られた頭はこのように見られた頭といささかの類似性もない。――たとえそれらが互いに合同であるにしても」と同様の見解を述べている（PI, p.195）。しかし、アスペクト転換に伴う視覚体験に意味を認めている「哲学探究」での Wittgenstein は、その「論考」での解釈にシンパシーをもちながらも、さらにそのことを概念的に明確にしようとしているのである。

Ⅱ　アスペクトの変化はある新しい知覚の記述ではない

それでは、「アスペクトの変移という表現は、ある新しい知覚の表現であって、同時に変化していない知覚の表現を伴ったもの」（PI, p.196）なのであろうか。つぎに Wittgenstein は、このことについて考察している。アスペクトが転換しうる画像の色や形の模写のうちに、この新しい知覚は現れることはない。つまり模写可能な色や形は、それらの<体制化>とは異なっている。しかし、アスペクトの転換を他人に示すことが

できるために、この新しい知覚はどこかに探し求められなければならないと想定し、その所在を「内的対象としての視覚像」に求めることは、Wittgensteinが繰り返し批判する「意味すること」を内的な過程としてとらえることと同じ結果になる。内的な視覚像について直示することは、赤の表象像を直示することと同様に「私的な指示」が可能であると考えることだからである。また、われわれがあらかじめアスペクトとして知覚可能な無数のパターンを所持していると考えることもまた、Wittgensteinは「現在の印象の因果的説明にすぎない」といって批判する（Zettel, § 209, 210）。なぜなら、かれが求めているのはアスペクト知覚のもつ概念的な境界を設定することであり、彼の用語によって言い換えれば、文法的な解明を与えることだからである。

アスペクトの変化を新しい知覚とみなすことは、ふたつの像をもちいて再認を説明することに類比的である。だが実際、その場合、われわれはふたつのものを見ているのではなくひとつのものを見ているのである。従って、その新しい視覚像はたんに「見るわたし」を後退させるだけの余剰なものになるだろう。

しかしながら、アスペクトの変化は現に起こるものである。ここからWittgensteinは、アスペクトの変化に気づくことはたんなる視覚印象の再現以上の概念的な把握を伴ったものであると考える。

> 「「として見る」というのは知覚の一部ではない。そのため、それは見ることのようでもあり、見ることのようでもない。」（PI, p.197）

言い換えれば、アスペクト知覚は思考を含んだ視覚体験である。

> 「従って、アスペクトのひらめきは、なかば視覚体験、なかば思考であるように思われる。」（PI, p.197）

アスペクトの転換に気づいたひとが「いまそれはウサギの頭だ」という場合、そのひとは単純な知覚の叙述をおこなっているのではなく、特定の認知を表出しているのである。そのひとはその画像がどのように見られるべきであるかを説明することができる。例えば、眺めていたこれら二つの線がウサギの耳として見られなければならない、といったように。その点において、アスペクトの気づきは概念的な把握を伴っているのである。

Ⅲ　アスペクト知覚は規則の理解である

ここで、われわれは、Wittgensteinの言及していないひとつの観点からアスペクト知覚をとらえてみることにしたい。それは、アスペクトの気づきを、画像から特定の規則を見てとることになぞらえるということである。例えば、ウサギ－アヒルの頭の場合、アヒルとしてしか見ることができなかった画像が、ウサギの頭として見えることに気づいたひとは、その画像がどのように見られるべきかということを直観的に把握する。そして、ひとに問われれば、その画像をどのように見るべきかについて教示することができるのである。このことは、ある数列についてその展開の規則を見てとり、その数列がどのように続けられるべきであるのかということを実際におこなって見せる場合と類比的だからである。その場合、与えられた画像や数列から、その「本質」をひとは見てとり、直接的に把握するのであり、ひとはそれを「推測する」のではない。

> 「規則の意味を推測する、すなわちそれを直観的に把握するということは、その適用を推測することに

他ならない。そしてそれはその適用の本質、つまり適用の規則を推測することではありえない。この場合には推測するということはまったく問題にならないのである。」(Zettel, § 306)

つまり、そこに何が見られているかということには、概念的な把握が先行する。アスペクトの変化に気づくこととは、この把握から画像を見直すことにほかならない。このとき、ひとはあらたなアスペクトから画像を「見ている」。そのため、アスペクトの変化に気づいているひとは、問いかけに対してかくかくのように答えるべきであるとされる。そしてその場合には、そのひとがその画像がウサギに見えることを「知っている」と有意味にいうことが可能である。また、かれがおこなうウサギの叙述は、見られたものの「直接的な記述」なのである。

しかしながら、アスペクトの変化に気づくことに対して、このように規則の理解から説明を与えることは、Wittgenstein の見通していたアスペクト知覚に関わる問題点のたんなる出発点に過ぎないとわたしには思われる。それはなぜか。アスペクトの変化に気づくことのうちには、いわば、たがいに相容れないふたつの側面が同時に含まれている。それはつまり、ひとが新しいアスペクトに気づいた場合、それを特定のアスペクトとして見ることのうちには、この視覚像はかくかくであるということを知っていることが含まれている。ひとはその対象をそこに「見ている」。このことがなければ、「気づき」は生じないであろう。しかし、もとのアスペクトとの対比において、それが解釈されたものであるという点においては、かくかくではないという可能性もまた同時にそこには示されている。つまり、同一の画像が、ウサギの頭としてみることができ、(アヒルの頭として見た場合には) またできないということに気づくことが、アスペクトの変化に気づくことにとって本質的なのである。しかし、まさしくこの点において、規則の理解とアスペクト知覚との単純な類比は途絶える。なぜならば、Wittgenstein にとって、規則の理解とは、適用された事例から内的な関係を見てとることであり、そこから並立する解釈の可能性を排除することにほかならないからである。そうでなければ、規則の理解に伴う「べき」は出てこないとかれは考える。だが、上に見たように、アスペクトの変化に気づくこととは、「として見る」ことのできる並立する解釈の可能性に気づくことであるとするならば、この点において規則の理解とは類比的ではないといわざるをえないのである。

ここからわかるように、Wittgenstein がアスペクト知覚の問題に関わったのは、アスペクトの変化という視覚体験が、意味や規則の理解についてかれが考察したものと同様の説明方法において解明できない側面を含むものであったからである。それは一言でいえば、「解釈に従って見る」ということである。これは Wittgenstein からみれば、形容矛盾のような響きをもっていたであろう。しかし、「哲学探究」のなかでそれまでかれがおこなってきた意味や規則の理解についての主張に適合するように、彼自身がアスペクト知覚の問題について対処するためには、規則の理解からアスペクトの変化の気づきに説明を与えることがとるべき方向であったとわたしには思われる。

わたしは、アスペクトの転換が可能な画像においては、異なったふたつの規則の提示が交錯していると考えたい。アスペクトの変化に気づいたひとは「意図的に」どちらの規則にも従うことができなければならない。すなわち、ひとつの画像が異なる解釈を提示する場合にもひとはそこに対象を「見ている」のである。そのとき、異なる解釈の可能性は、いわば、息をひそめているのである。

「もしわたくしが思考のシンボルを<外から>ながめるならば、それはしかじかに解釈されうるだろう、ということに気づく。だがそれがわたくしの思考の道程におけるひとつの段階であるならば、わたくしにとってそれは自然な滞在地であり、わたくしはそれ以上の解釈の可能性を問題としない(あるいはそ

れに頭を悩ませない)。それは丁度、わたくしが列車の時刻表を、それがいろいろに解釈できるということを問題にしないで、所持し、使用するようなものである。」(Zettel, §235)

アスペクトの変化に気づくことは、やはり、規則の理解に本質的であった内的な関係を見てとることを前提としている。そのことを見てとっているひとにのみ、アスペクトの変化の気づきという視覚体験を帰属させることは有意味なのである。

「わたくしがアスペクトのひらめきにおいて知覚するのは対象のひとつの特性なのではなく、その対象と他の対象との内的な関係なのである。おおよそのところ、<この脈絡における記号の見え>は、ある思想の余韻なのである。」(PI, p.212)

つまり、そこに何を見るかということは、各人にとって恣意的なものではあり得ない。規則の理解が適用によって示されるのと同様に、ひとは見てとった対象について記述し、説明できなくてはならない。「として見る」ことができることもまた、そのような理解を前提としている。そのときはじめて、われわれは、そのひとが異なったアスペクト知覚において見いだした対象を「知っている」といいうるのである。

アスペクト知覚の問題は、はじめにWittgenstein自身が提示したように、その視覚体験が「見る」と「として見る」の交錯する焦点にあったため、かれにとって、概念的な境界設定が困難な問題となった。しかし論を終えるにあたって、少なくともWittgensteinのとるべき解決の方向性は以上のようなものであったということを結論としたい。

文献

Ludwig Wittgenstein

PI: *Philosophical Investigations*, trans. G. E. M. Anscombe, Blackwell 1958.

Zettel: *Zettel*, ed. G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright, trans. G. E. M. Anscombe, Blackwell 1967.

Tractatus: *Tractatus Logico-Philosophicus*, trans. C.K. Ogden, Routledge 1922.

謝辞

私は本来、科学哲学の専攻ではないが、論理学、物理学、経済学にわたって、妥協することなく研究された藤田晋吾先生からは、間接的にであれ哲学研究のひとつの態度を学ばせていただいた。また、私が当研究科の助手を務めていたときには、先生は研究科長として、新研究科移行に関わる膨大な雑務に忙殺されていた。それにもかかわらず、私自身はあまり有能な助手とはいえなかった。それゆえ、ここで退官後の先生のなおいっそうのご活躍を祈念し、いままでの学恩、そのほかのことどもに対する感謝の言葉に代えさせていただきたい。

(うえだ・とおる　筑波大学非常勤講師)